



## 自然保護と植物

秋 山 茂 雄

もともと狭い国土に人々がひしめきあ  
い、この二十年さらにせばめられたうえ  
に産業の進展いちじるしく、開発がめざ  
ましくつづけられている現在、このため  
に自然を破壊し、真善美の探究といった  
本来の文化をおろそかにすることがあつ  
たらそれは大きな間違いであろう。  
自然は一度破壊すると、もともにもどす  
ことはまず不可能といつてさしつかえな

い。札幌市の円山、藻岩山は天然記念物  
であり、これにくらべると劣るが、近く  
の三角山は森林がかつてまる焼けになつ  
たそうで、ひとたび焼けたらもとの姿に  
はもどらなかつた、そのうえ、近年は人  
力をもって破壊の一端をたどっている。

私は昭和五年に本州から渡つてきて、昨  
年まで北大に勤めてきたが、ここの環境  
のすばらしさは、他の大学などのおよぶ  
ところではなく、クラーク先生の像、緑  
にはえる芝生、白く点々と並ぶ旧学舎、  
あるいはポプラ並木などもさることなが  
ら、人の世の雑事をよそに古い夢を宿す  
エルム（ハルニレ）その他の野生草木、  
はるかに見渡す周辺の山々の眺めなどの  
自然の美が、どのくらいよい印象を人々  
に与えているかわからない。

この北大内には開墾をまぬかれたとこ  
ろもあり、かつてはクロユリ、オニノヤ  
ガラ、イチゲの一種、そのほか珍、広布  
種をふくめ自然状態がかなり残っていた  
ものである。戦後放牧などでだいぶいた  
んできたが、最近行つてみたら、全部も  
のの見事に破壊されてしまつていた。実  
際には広さのきまつた構内に施設をふや  
す以上、やむにやまれなかつたことはわ  
かるが、残念に思っている人間もあるこ  
とを銘記していただきたいものである。

ミズバショウは、旧獣医学教室の裏の湿地に辛くも余命を保っているから、ほかの場所のものがほとんどなくなってきた現在、せめてここだけ抹殺されないよう管理していただきたいものである。

直接植物のことではないが、上京の帰途、函館本線で銭函駅を通過して間もなく、眺望は俄かにひらけ、本州からきた乗客の一人は思わず「すばらしい、まるで大陸へ行ったようだ」と感激していた。その人が実際大陸を見たかどうか判らないが、本州方面で見られない広潤な石狩平野の様相に感激して、大陸的といったのであろう。つまり、このような自然美がいかに現代の人心をたのしませ、ゆたかにさせたかをまざまざと見せつけられたわけで、自然の保護によってさらにこれらの精神面にうらづけすることがいかに大切であるかを感じる。

北海道にある植物は一般の方に理解されているものも多いようだし、そのいくつかは天然記念物に指定されているので一々例をあげるのをさげ、以下植物に関する自然状態について思いついたことを二、三あげてみたい。

北地の海岸を主産地とするハマナスも本州では分布の南限がいろいろいわれて

いるが、本道でいたるところにあるこのハマナスでさえ、たとえば石狩川の河口あたりのものは、観光客とか海水浴客が頻繁に往来し、昔を想うとウソのように荒れはて、栄枯盛衰の甚だしきをなげかざるを得ない。このようにありふれた植物でも心ないとり扱いをすれば、衰亡の一途をたどることを忘れるわけにはいかない。

北海道の植物の自然群落で、南方とくらべて興味あるものはいろいろ多いが、中でもその代表的なものとしては泥炭地植物の多いこと、高山植物とよばれるものが低いところから多数現われていることとあろう。泥炭地とは湖沼などに生育した草木が枯死して、低温のため完全に腐蝕しないで泥炭となったところで、水中にあつてヨシとかスゲのようなもの茂る低位のもの（これは比較的開こんしやすい）と、ミズゴケが積みかさなつて水上に現われ、酸性度いちじるしく特異の植物の生育する高位泥炭（開こんがわずかしい）とあるが、後者も種々土地改良がくわえられ、昔石狩川流域いたるところにあつた広漠な泥炭地もほとんど見受けられなくなり、その他の泥炭地も逐次改良されている。

これは増産のためもちろん結構である

が、その成因、所産植物の研究などのために一部でも保存しておきたかった。いまあげたのは主に低地にあるものについてであるが、標高一、〇〇〇メートル内外のところにも泥炭化して浮島をつくっているところがあるから、そうしたものを保存し、現状破壊のないよう保護することもきわめて必要であろう。

高山植物とは山麓から登っていつて森林の絶えた上のところ、冬は氷雪、夏は直射日光と雲に曝されるといった土地に生命を保つ、多くは可憐な花の美を競う植物を指すが、これらは貴重なものであるが、密採されることが多いのはまことになげかわしい。好事家に、嚴重に取りしまりを行なうてほしいと思う。

道南の函館山は、かつては要塞地帯で一般の出入りは禁止されており、そのため自然状態は維持されていた。ここは古くは離れた島だったときが、特に珍しい植物があるなしは別問題としても、近年人々の出入りがいちじるしく、保存上の不安が多くなってきた。函館附近では道南のどこかでとつたらしいドウダンツツジが売り物になっていたときく。

札幌定山溪の奥の豊平峡は昭和三年にはじめて行ったが、野趣に満ちた雰囲気とともに樹林草木の眺めは、その後再三

の入林とともに愛着を深めていった。一昨年入林したときも炭酸泉あたり、グンナイフウロ、ハナシノブ、エゾイワデンダ、ヤマハナソウ、その他もろもろの草木は剛強、あるいは優雅にその美を競っていて、四辺の風光とともに天国に遊ぶの感を覚えたものである。ところがこのあたりが貯水池となり、他にみられないこれら植物景観が、水葬礼をうけねばならぬ破目におちいるらしい。本工事中工については目下慎重に考慮中と思うが、水資源の確保とともに、自然の維持も人生にきわめて有意義であることを真剣に考えていただきたいものである。

つぎに太平洋斜面のサクラソウ属植物の自生地についてであるが、この属のものは北海道各地に狭い分布範囲をなすものがあって、太平洋沿岸には所々にみられ、たとえば、釧路から阿寒湖畔にいたる道路に近くオオサクラソウの大群落もある。日高のサクラソウは、以前はいたるところに群落をなしていたが、近年は開発の進展とともにひどくいためつけられていく。いまにして保存に心がけないと、うらみを千載に残すことであろう。

(金沢大学・教授)